

パラグアイ人と日系人が  
共に繁栄する社会づくりを



駐日パラグアイ共和国特命全權大使

田岡 功

駐日パラグアイ共和国特命全權大使の田岡功さんは、48年前、一家でパラグアイへ移住した日系一世。大木がうっそうと生い茂る原生林を耕地へと切り開き、今日の同国経済を支える農業を推進するとともに、日系人のより良い暮らしを目指してフラム移住地のラパス市昇格に尽力してきた。その功績は1997年、戦後の移住者として初めて受章した国家功労勲章が物語る。

今年には日本人のパラグアイ移住70周年。現地の日系人は約7000人、日本で12000人ほどが出稼ぎし、多くは日本への高き誇りを持ち続けている。大使就任と同時に日本国籍を離脱した田岡さんも日本を愛し、心はいつまでも日本人でありたいとほほ笑む。2つの祖国、パラグアイと日本のために何ができるのか——日系人初の大使がその心情を語る。(続きは55ページ)



## 2つの祖国をつなぐ役目を 全うしたい

駐日パラグアイ共和国特命全権大使

### 田岡 功

Taoka Isao

1943年東京都出身。父親の故郷である徳島県三好郡三野町（現三好市）に移り住み、58年に一家でパラグアイへ移住。同国南東部のフラム移住地（現ラパス市）で農業に従事し、ラパス農業協同組合の組合長、パラグアイ日系農協中央会会長などを歴任する。81年にラパスを市に昇格させると同時に初代市長に就任し、約18年間市政に従事。97年、パラグアイ国家功労勲章受章。2004年8月、日系人で初の駐日大使として日本に着任した。



photos by Suto Naotoshi

14歳のとき、家族でパラグアイへ移住しました。当時、日本では戦後の農地改革が行われており、父親は大地主になりたいという夢があったのでしょう。パラグアイで50町歩（50ヘクタール）もの土地が手に入るの大きな魅力でした。私にとっても、南米に移住するというより戦争に勝った米国に行くという認識が強く、あこがれでもあったのです。60日間の船旅後、ブエノスアイレスから列車でパラグアイへ。列車は揺れがひどく腰掛けも硬い板で、食料は乾パンと羊肉の缶詰・・・希望と裏腹に、だんだん心細くなったのを覚えています。

着いたフラム移住地は大木が茂るジャングルで、理想の大農場とは別世界でした。もう日本には帰れないし次々と移住者が来るので、早く自分たちも土地を決め、開拓し、自立を考えねばなりません。川が近く水の便が良い場所は石礫地や湿地で耕作に適さないことが多く、逆に高台の畑に向く平地は深い井戸を自力で掘る必要がありました。最近、ドミニカ移民が話題になりましたが、ここでも皆が不便な思いをし、他国へ再移住したり、出身県や国に飢えを陳情する者もいました。それに応えた日本政府により道路、学校、病院などが整備されました。農村電化も徐々に進み、JICAの協力で新しい農作物の導入や品種改良も実現しました。一方、選んだ土地が農業に不向きでつらい日々を送る人もいました。

原生林が開かれた後は良い畑でしたが、当初は何を植えるか、何が金になるか分からず苦労しました。大豆を生産し始めてから暮らしは徐々に向上し、品種改良で収穫量

は約3倍に伸び、輸出できるようになりました。1人当たり国民総所得が1,000ドル以下の中、機械化した日系農家は4、5万ドルを獲得するようになりました。しかし日系人の成功も共に働いたパラグアイ人の協力があってから。今後は双方が共に伸びていかねばと考えたとき、移住地を市にし、より公的にする必要がありますと思いました。

市制実現には時間がかかり、フラム移住地を視察した国会議員に「あなたたちはここで日本をつくるのか」と言われたこともありました。会話も看板も日本語だったのでそう言われても仕方なかったと思います。だから皆が分かるよう、スペイン語の併記など改善を図り、5年後、ラパス市として承認されたときには本当にうれしかった。今後も日系人とパラグアイ人が共に繁栄する社会を築けるよう、JICAに引き続き技術指導をお願いしたい。

日本の生活も2年が過ぎました。日本で暮らす人には、日本の良さを当たり前とってしまう人が多いようです。パラグアイの日系人は、日本とパラグアイの両方を知ること、パラグアイの良さを感じると同時に、日本への誇りを持ち続けています。日本の若者にもぜひ海外へ出て日本の良さを見直してほしい。また勤勉で誠実といった日本の良いところを大切にすると日系社会と多岐にわたる日本の協力は、パラグアイにたくさんの親日家を育てました。日本人にとって南米はまだまだ遠い存在ですが、ビジネスレベルでもさらに関係を広げ、今まで以上に両国を近い間柄にすることが、2つの祖国を持つ私の役目だと思っています。